

巻頭言

「ドン」が吠えた

会長 山崎 學



長生きしていると、時に良いことも悪いこともある。過日、東京新聞から精神科における拘束について取材を依頼され、敵味方関係なく取材を拒否しない心の広い「ドン」は快く取材を受け入れることにした。東京・朝日・毎日新聞、NHKは心象的には胡散臭い先入観があるが公益社団法人会長としては選り好みできる立場にはないし、特に民間精神科医療に対して偏見報道を垂れ流し続ける社に対して、地域で会員病院がかいている汗を少しでも理解してほしいという気持ちで快く取材を受けることにした。

当日飛び込みの案件が入り、取材は10分遅れで始まった。女性記者は精神科病院における拘束問題から始めた。ステレオタイプに厚生労働省が出した平成15年から平成25年の10年間の間で拘束案件が5,000件から1万件に増えたことについて説明を求められた。同じ質問について8年前にも答えている。どうも精神科の身体拘束は8年経っても気になるようである。ちなみに、その後は平成29年の1万2,528件をピークとして令和4年には1万903件と拘束は大幅に減少に向かっている。精神保健福祉法の法的手続きに沿って精神保健指定医が慎重に診察して行う身体拘束行為について現場を知らないど素人に口を挟ませたくないのが「ドン」の本音である。ましてや、日本における精神科医療のバックグラウンドを理解していない国際障害者権利委員会などに口を挟まれる筋合いはまったくない。

「ドン」は20年近く欧米の精神科医療を視察し、アングロサクソンの本音と建前の狡猾な使い分けに辟易しているのである。彼らは視察に際して視察用に準備された病院を中心に見学させる。見学した夜に見学先のスタッフと懇親会をすると酒に酔ってスタッフの本音が出てくる。この本音がとても面白い。昼間話したことは多くの見学者に話す建前であると口を滑らせる場面を何回も体験している。イタリアではバザーリアの改革で州立精神科病院を閉鎖したことにより急性期対応病床が大幅に不足し、民間病院の精神病床を借り上げて運用しているのが実情だし、救急外来で診察してデボ剤で急速鎮静させたまま外来の椅子で一晩過ごさせ、翌朝には帰宅させていると聞いたのを思い出している。ドイツでも精神病床は少ないが、慢性期患者は倒産したりゾートホテルを病院に改装して施設扱いで収容しているといった隠れ病床の話も聞いた。しかもこれらの施設は町から離れた場所に位置しており、冬場は離院しても町にたどり着く前に凍死してしまうといった話も聞いたことがある。

次いで女性記者は滝山病院事件に触れてきた。滝山病院は精神科関連の人工透析、人工呼吸器管理の患者さんを公的機関が紹介して入院させていた病院と聞いている。この病院の常勤職員は

10%といった病院経営の特殊性はさておき、この構造は昭和44年に近畿一円から多くの処遇困難患者を率先して引き受けて多数の不審死を出した安田病院事件（その後、大和川病院に病院名を変更して経営を継続したが、平成9年に再び多数の不審死を出して廃院になっている）、昭和59年に起きた関東一円の精神科病院から送られた処遇困難患者を引き受けていた宇都宮病院事件と構図が似ていると「ドン」は考えている。処遇困難患者、重篤な身体合併症患者を民間病院に押し付ける国の精神科医療に対する姿勢が変わらない限り、再びこうした不祥事が起こることを懸念している。国はこうした患者こそスタッフが充実している公的病院に受け皿をつくらせるべきではないのか。

最後に女性記者からなぜ8期目と長期にわたる会長職にとどまっているのかとの質問を受けた。マスコミを含めて精神科医療に対する社会的偏見の中で精神科医療に対する正当な評価を診療報酬の中に入れ込むまでは会長職を辞するつもりはないと大見得を切った。余計なお世話だ。東京新聞のインタビュー記事が掲載された日の夕方に息子から取材記事でネットが炎上していると聞かされた。人物紹介欄ではまた拳銃発言炎上、これもお約束のような安倍晋三元総理のお友達、民間精神科病院を束ねる「ドン」とバイアスをかけた記載が気に入らない。ネット上ではおおむねは変な爺が吠えているけど面白い、女性記者の煽りがひどいといった同情的なコメントが大半を占め、「ドン」は心を強くしたものである。